



Title	ミクロネシア・チュークの現日本語学習者による日本語音声
Author(s)	土岐, 哲
Citation	阪大日本語研究. 2000, 12, p. 21-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12571
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ミクロネシア・チュークの現日本語学習者による日本語音声 The Japanese Phonology of recent learners in the Micronesian Chuuk

土岐 哲
TOKI Satoshi

キーワード：チューク、モエン方言、若年層の音声、老年層との異同、文レベル

0. 序

これは、Satoshi Toki (1998) *The Remnants of Japanese Phonology in the Micronesian Chuuk*の後半部に加筆訂正してまとめなおしたものである。

「ミクロネシア・チュークに見られる残存日本語の音声」*では、今から50数年以前に日本語を習い、使用していた人々の現在の日本語音声を中心に述べた。しかし、これらは50数年前からずっとこのようであったのか、あるいは学習当時はもっと違っていたものが、50年もの年月が経つ内に、変化して現在のようになったのかが分からない。

そこで、現在、現地の高等学校で日本語を学習中の生徒に対して若干の調査を行い、現役で学習中の人々による日本語音声についても調べてみることにした。社会的状況も言語的背景も、社会全体が英語中心になっていたり、日本語教員である日本語話者の音声がそれなりに変化しているなど、50数年前とは種々の点でかなり違っていているから、同列に考えることには無理な点もある。しかし、それならば、条件の違いがもたらす要素とは何か、それでもなお共通する要素とは何かを見るのもそれなりの意味があると考えた。

1. 若年層の音声（高校の日本語学習者）

今回、素材とした音声資料は次の4名（調査当時）のものである。

M氏（州立チューク高校卒業）	1977年	モエン生まれ（女）
ME氏（同上 在学中）	1979年	モエン生まれ（女）
E氏（私立サラメンチューク高校在学中）	1978年	モエン生まれ（女）
K氏（同上）	1979年	モエン生まれ（女）

(比較的反応がよいとして日本語教員から推薦され、放課後のボランティアを引き受けてくれた生徒はたまたま女生徒だけであった)

この調査を実施したウェノには高等学校が3校あるが、そのうち近接しているのがこの2校である。教員の説明等によれば、とくに私立Saramen Chuuk High Schoolでは英語教育に力を入れているという。筆者が同校を訪問した時に見た朝の集会などでも高校構内に入ったら現地語は使ってはいけないなどと訓示していた。この点が両校で日本語を学習した結果に何らかの影響を及ぼしている可能性もある。

また、老年層の日本語運用能力とは大きな開きがある。老年層が学習した当時、ほとんどが午前中に「公学校」で学習した後、午後からは日本人の家庭や施設で実習として下働き等をし、直接日本語を使う機会があったという。教室の内外でほとんど毎日日本語に接していたことになるし、日本語を話すことに対する必要性・動機付けは非常に高かったはずである。

それに比べて、今の高校生たちの場合、1人の生徒が週に受講できる日本語は2時間程度であり、それ以外に日本人と会って日本語を使ってみる機会はほとんどない。

従って、高校生の場合、日本語で自由に話すなどというレベルには到達しておらず、多くはこちらが読み上げる日本語の単語や短い文をそのまま繰り返してもらうことの方が多かった。その繰り返しは、中にはある程度正確に実現されることがあるものの、それでもなお母語の影響の強く現れることも少なくはなかった。

2. 1 単音レベル

<正の(全面的もしくは部分的)転移と考えられる点>

- 1) 五母音：戦前に日本語を学習した老年層と同じで、大きな違いは観察されない。
- 2) 狭母音の無声化：老年層では、この現象が安定して観察された。高校生も比較的安定はしているが、老年層ほどの安定性は認められない。一部に、日本語の音環境としては脱落や無声化が起こりうる場合であっても、実現されない例も少し観察された。

(個人名付きは、その人にのみ現れたもの)

実現された例：

/ asita /	「明日」	- [aʃita]	
/ hakuʃu /	「拍手」	- [hakuʃu]	
/ hitocu /	「一つ」	- [çitotsu]	E氏

/ futacu / 「二つ」 - [fʉtatsu] E氏

実現されなかった例：

全体から見れば、非常に少ないが、いずれもE氏の揺れによるものである。

/ hitocu / 「一つ」 - [çitotsu] E氏

/ hukuro / 「袋」 - [fukuro] E氏

3) ガ行鼻音の実現：

これも、全体的に見れば比較的安定しているが、個人によっては揺れが見られる。

実現された例：

/ joruganagai / 「夜が長い」 - [joruganagai] E氏

/ miganaru / 「実がなる」 - [miganaru] K氏

/ kagi / 「鍵」 - [kagi] K氏

これらは原則として他の2人(M氏, ME氏)にも共通する。ただし、M, MEの2人(姉妹)には、「ナ行イ段 / ni /の子音」を「ガ行鼻音、イ段 / gi /の子音」で発音する現象が見られた。これは、個人的特徴であって、まれに日本語話者にも観察されることであるが、いずれにしてもガ行鼻音の習慣を持たない人の場合である。

/ miniiku / 「見に行く」 - [migiiku]

/ asanikuru / 「朝に来る」 - [asagikuru]

/ miseniiru / 「店にいる」 - [misenjiiru]

/ kokoniiru / 「ここにいる」 - [kokojiiru]

K氏の一部にはガ行鼻音の子音が鼻音ではなく「有声破裂音」または「有声摩擦音」で実現される例が見られた：

/ akigakuru / 「秋が来る」 - [akigakuru] K氏

/ kigaaru / 「木がある」 - [kiyaaru] K氏

この件については、日本語教員Y氏(1971年生まれ、川崎市で生育)の音声調査でも同様の結果であった。

<負の転移と考えられる点>

A) 日本語の有声破裂音、有声摩擦音を無声音で発音すること。

/ biN / 「瓶」 - [pin]

/ boRsi / 「帽子」 - [po:ji] 一部に[bo:ji]の例もあり

/ kabaN /	「カバン」	- [kapan]
/ deNwa /	「電話」	- [tenwa]
/ midori /	「みどり」	- [mitori]
/ giNkoR /	「銀行」	- [kiŋko:]
/ gohaN /	「ご飯」	- [kohan]
/ huzisaN /	「富士山」	- [futʃisan]
/ zikaN /	「時間」	- [tʃikan]
/ zidoRsja /	「自動車」	- [tʃido:ja]*

* ここでは、一部「有声破裂音」が実現されているが、このような例は、高校生の場合、他にも少なくはない。(語の馴染み度の影響か)

/ obeNtoR /	「お弁当」	- [obento:]
/ deNki /	「電気」	- [deŋki]
/ hadaka /	「はだか」	- [hadaka]
/ gaQkoR /	「学校」	- [gakko:]
/ garasu /	「ガラス」	- [garasu]
/ ziteNsja /	「自転車」	- [dʒitenʃa]
/ zidoRsja /	「自動車」	- [dʒido:ja]

B) Aと系列は同じであるが、更に調音点の異なる音にすること。

/ mizu /	「水」	- [midʒu]
/ miQtu /	「三つ」	- [mittʃu]
/ paNtu /	「パンツ」	- [pantʃu]

この現象も、比較的安定して生じるもので、個人差も大きくはない。また、

/ sositara /	「そしたら」	- [ʃoʃitara]
/ sjukudai /	「宿題」	- [sukudai]

のように、[ʃ]、[s]の混同に近い現象も時折見られる。

C) 声門音 /h/の脱落

/ hasi /	「はし」	- [aʃi]
/ hako /	「はこ」	- [ako]

ただし、/ha/「歯」- [ha]、/gohaN/「ご飯」- [kohan]のように比較的正確に実現されることもあり、また、次のように不要な/h/を実現させてしまう場合もある。

/ erabu /	「選ぶ」	- [herabu]
-----------	------	------------

/koega/ 「声が」 - [kohega]

D) 弾き音をふるえ音で発音すること。

この現象は安定して存在するが、老年層の場合ほど明瞭には現れないことも多い。

2. 2 音節レベル

モエンには母音・子音に長短の区別があって、それが日本語の「長母音」「促音」「撥音」等の実現には問題がない。拗音の直音化 (/bjoR/ - [bio], /kjoR/ - [kio]) のようなことも目立たない。

2. 3 単語レベル

ここでも、日本語の種々のアクセント形式を聞かせ、その場で繰り返してもらった結果を示す。高校生の場合、繰り返しのパターンには個人差が目立ち、老年層に近いパターンとモデルに近いパターンが観察された。＜A＞はモデル、＜B＞は結果の典型（L: 低, M: 中, H: 高に該当）

＜A＞ ＜B＞

/hasi/ 「橋」: LH HL

/isi/ 「石」: LH HL

/hana/ 「花」: LH HL

/mura/ 「村」: LH HL

/hata/ 「旗」: LH HL

/misaki/ 「岬」: LHH LHL

/kuruma/ 「車」: LHH LHL

(以上 M 氏)

/kami/ 「紙」: LH LH

/isi/ 「石」: LH LH

/sima/ 「島」: LH LH

/inu/ 「犬」: LH LH

/tuki/ 「月」: LH LH

/kuruma/ 「車」: LHH LHH

/otona/	「大人」	: LHH	LHH
/senaka/	「背中」	: LHH	LHH
/kemuri/	「煙」	: LHH	LHH
/mukasi/	「昔」	: LHH	LHH

/midori/	「緑」	: HLL	HLL
/tajori/	「便り」	: HLL	HLL

(以上 K 氏)

2. 4 文レベル

文のレベルにおいても、老年層に近いものとモデルに近いものがあり、それぞれ単語レベルと同一人物によるものである。

老年層に近く、母語の特徴が明瞭に出ていると考えられる例：

		< A >	< B >
/asegaderu/	「汗が出る」	: HMMML	LHLHL
/amegahuru/	「雨が降る」	: HMMML	LHLHL
/kocgaderu/	「声が出る」	: HMMML	LHLHL
/harugakuru/	「春が来る」	: HMMML	LHLHL
/madogaaru/	「窓がある」	: HMMML	LHLHL
/hasigaaru/	「箸がある」	: HMMML	LHLHL
/kazegahuku/	「風が吹く」	: LMMML	LHLHL
/edagaaru/	「枝がある」	: LMMML	LHLHL
/otogasuru/	「音がする」	: LHMMM	LHLHL
/inugairu/	「犬がいる」	: LHMMM	LHLHL
/utagaumai/	「歌がうまい」	: LHMMML	HLLLHL
/usigairu/	「牛がいる」	: LMMMM	LHLHL
/torigairu/	「鳥がいる」	: LMMMM	LHLHL

/kaogaakai/ 「顔が赤い」 : LMMMMM LHLHL

その場で繰り返した限りでは、かなりモデルに近い方の例：

		< A >	< B >
/asegaderu/	「汗が出る」 :	HMMML	HMMML
/amegahuru/	「雨が降る」 :	HMMML	HMMML
/koegaderu/	「声が出る」 :	HMMML	HMMML
/harugakuru/	「春が来る」 :	HMMML	HMMML
/mado gaaru/	「窓がある」 :	HMMML	HMMML
/hasigaaru/	「箸がある」 :	HMMML	HMMML
/kazegahuku/	「風が吹く」 :	LMMML	LMMML
/edagaaru/	「枝がある」 :	LMMML	LMMML
/otogasuru/	「音がする」 :	LHMMM	LHMMM
/inugairu/	「犬がいる」 :	LHMMM	LHMMM
/utagaumai/	「歌がうまい」 :	LHMMML	LHLLML
/usigairu/	「牛がいる」 :	LMMMM	LMMMM
/torigairu/	「鳥がいる」 :	LMMMM	LMMMM
/kaogaakai/	「顔が赤い」 :	LMMMMM	LMMMMM

3. 老年層との異同

植民地時代に日本語を学んだ人々は、流暢さ、それなりの語彙力、その他運用面で圧倒的に優位であり、極めて限られた時間数で1-2年学習しただけの高校生とは最早比べようもないかに見える。しかも、高校生の資料は、多くが繰り返しによるものであるから定着性にどの程度の保証があるかは定かではない。しかしながら、得られた限りの音声資料を詳細に観察してみると、双方の成り立ちに関わる根本的差異の部分にそれぞれの特徴が見られることに気付く。

それらを、分類項目別に単純化し「老年層」と「高校生」を比較してみると以下のように纏められよう。

＜項 目＞	＜老年層＞	＜高校生＞
五母音	日本語と一致	一致
母音の無声化	ほぼ一致	大筋で一致はするが 一部に欠落例あり
ガ行鼻音	ほぼ一致	大筋で一致はするが 一部に欠落あり
有声破裂・有声 破擦の無声音化	個人差もあるが、大筋で 無声音化	個人差あり、有声可能なケース が目立つ。英語の影響か
歯茎音の口蓋音化	多し	多し。双方向の混同もあり
/h/の欠落	欠落・過剰付加あり	欠落、比較的少なし
ふるえ音	目立つ	老年層ほどは目立たず
アクセント	後ろから2音節目のみ の1形式	個人差あり、 その差が大きい
イントネーション	焦点外の文節の抑え込み ほとんどなし	個人差あり 抑え込みの可能性あり

これらの差異がなぜ観察されたのかについては、さまざまな要因があるであろうが、それを明らかにするためには、更に十分な時間と種々の実験やインタビュー等が必要であろう。また、若年層で更に日本語の上達した例に当たってみる必要もある。今回の資料だけでは十分に追究することはできないが、ここまで見てきた中で考えられることをまとめてこの報告の結びとしたい。

4. 考察とまとめ

今から50年以上も前に日本語を学習した人々の日本語音声は、その後、長期にわたって日本語を使わずにいたことによって、風化もしくは後退が生じ、今日の姿となったのか、あるいは、学習間もない頃、または、その日本語を使って生活していた頃の姿を留めているといえる

のかという観点から考えてみる。

まず、上記の老年層の日本語音声における偏りと現役高校生の日本語音声による偏りとを比較対照してみると、特徴として挙げられる項目数やその内容がほとんど一致していて、異なる点は個人差もしくは程度差として現れているだけである。

では、モエンの第1言語そのものに大きな変化がなかったかどうかという点について考えてみると、1970年代の調査、チューク語モエン方言の音韻組織を基にして老年層、高校生双方の音声を見た限りでは、さほど大きな変化があったとは考えにくい。若干の変化をもたらした可能性があるとするれば、日本語などからの借用語等が直接的要因として考えられるが、借用語の表記や実際の音声から観察してみても、例えば、それによって有声破裂音が出現し一般化したとか、頭子音の/h/が安定的に出現した等ということもない。破擦音に歯茎音がなく、口蓋音に偏る点も老年層・高校生共に共通している。

では、実際に出てきた老年層の日本語音声と高校生のそれとの違いはどのように考えられるのであろうか。その違いには個人的なものや程度の違いとして現れるものがあるにしても、結局のところ、その根本的な差異は、いずれも、老年層と高校生の第2、第3言語の学習経験についての構造的差異に起因しているものと考えられる。

老年層は、第1言語としてのチューク語モエン方言に第2言語としての日本語がかなり厚く被さり、その後、個人によって第3言語としての英語が被さったり、被さらなかったりしているが、第3言語としての英語は、日本植民地時代終了後にハワイで研修を受けた経験を持つ一部のご老人ですら、彼らの日本語音声にまで影響が及んでいると考えられるような現象は観察されていない。老年層の日本語の偏り方が明確に、そして安定した形でモエン方言の特徴を残しているのは、長い時間がかかっていることも主要な原因として考えられるが、第1言語と第2言語による明確な二重構造も日本語音声の偏り方の安定性に大きく影響を与えているものと考えられる。

それに対して高校生は、第1言語としてのチューク語モエン方言に、第2言語としての英語がかなり厚く被さり、その後、第3言語というよりは、むしろ外国語としての日本語が薄く被さっていると考えられる。日本語音声の偏りが老年層ほど単調ではなく有声破裂音、有声破擦音のより頻繁な実現、とくに英語に力を入れている高校の学習者による日本語アクセント型やイントネーションの正確な再現等は、いずれも日本語に接触する以前に英語を学習していたことが関係しているものと考えられる。なぜなら、これらの特徴は、いずれもチューク語にはないものであり、英語ならば有声破裂音、有声破擦音、移動アクセント、イントネーションによるアクセントの弱化など、その「正の転移的」影響が考えられる。当然、若い学習者の「柔軟性」も大きく作用しているであろうが、それを考えるならば、老年層の人々が日本語を学習した

当時の年齢は更に低く、8歳以降であったのであるから、学習者の柔軟性だけでは十分に説明できないであろう。

もう一つ考えられることは、学習モデルとなった日本語教師自身の音声である。例えば、老年層のガ行鼻音が安定して実現されたのは、チューク語にも似た要素が含まれていることの他に、当時の日本語教師の発音においてもガ行鼻音が安定していた可能性がある。(老年層の方から聞いたところでは、当時の日本語教師の中に東日本出身者が多かったことも関係があるかも知れないが、これは統計的に明らかなわけではない。)

それとは対照的に、現役高校生が日々接触していた若手日本語教師の発音を一部録音して観察したところでは、いずれも最近の日本語教師らしく、語中・語末のガ行音の鼻音性はなかった。第1言語にガ行鼻音に通じる要素が含まれていたとしても、学習中に接することがなければ、活用のしようがない。それよりも英語のレパートリーから、軟口蓋破裂音や摩擦音の有声音の流用を考える方が現実的である。

終わりに当たって、ひとつ注意しなければならないことをつけ加えるならば、これまでは説明を単純化するために、第1言語の要素、第2言語の要素というように照らし合わせ、第1言語にない要素は第2言語から持ってきて流用されるかのような論法で述べたが、音声の認識や生成のレパートリーを学習したり、応用したりすることというのは、結果だけから見れば、機械の部品を取り替えたりするような図式に見えるかも知れないが、実際は、そのように単純なことではなく、もっと複雑な過程を経て実現されるのであろうということである。何らかの方策を講じて、その中間過程にメスが入れられるのでなければ現実には起きている細々とした例外的事例についてまで深く知ることはできないであろう。そのレベルにもう一步近づくためには、それなりの方法論も考え出さなければならないが、その他にも、もう少し日本語学習の進んだ若年層を捜しだし、老年層にインタビューした場合と近い条件で音声資料を収集し、同列に分析してみることも必要である。

【参考文献】

- Hiroko Chinen Quackenbush (1970) *Studies in the Phonology of some Truckic Dialects*. The Doctorate dissertation, The University of Michigan
- Satoshi Toki (1998) *The Remnants of Japanese Phonology in the Micronesian Chuuk*. Memoirs of the Faculty of Letters, Osaka University Vol. XXXVIII, 11-48
- Ward H. Goodenough and Hiroshi Sugita (1990) *Trukese-English Dictionary, Supplementary Volume: English-Trukese and Index of Trukese Word Roots*. American Philosophical Society
- 土岐 哲 (刊行中) *『ミクロネシア・チュークに見られる残存日本語音声』『木村宗男先生米寿記念日本語教育史論集』凡人社
- 松岡静雄 (1937) 『ミクロネシア語の総合的研究』岩波書店

これは、平成6年度から平成8年度の文部省科学研究費補助金（国際科研）による海外調査研究「旧統治領南洋群島に残存する日本語・日本文化の調査研究」（研究代表者：土岐 哲）の研究報告の一部です。調査の期間中ご協力くださったすべての方々に対し、感謝申し上げます。

とき さとし（文学研究科教授）